

## 国語(B方式)

## 注意

1. 問題は全部で10ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

## マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
---	----------------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

近世の終わりの歌人、橘曙覧たちばなあけみに次のような歌がある。

病にわづらひける時

死ぬるやまひ薬飲まじと思へるをうるさく人の薬飲めといふ

死ぬべしと思ひさだめしわがやまひ医師くすしくるしめ何にかはせむ

死ぬる命とりかへさるるくすり師は世はひろけれどあるべく思はず<sup>1</sup>

熱烈に復古を願う勤皇をうたった曙覧であるが、明治の世があと数日でおとずれるといふのに、慶応四年八月二十八日、五十歳で世を去った。その病の床にあつても、彼はこんなふう<sup>2</sup>に死を諦観し、きわめて淡白な心で病中の身を保とうとした。曙覧の人柄でもあろうけれど、また薬方、医師の施術といったものを信頼していないのである。

五月廿八日より病床にありけるままに、野山のけしきも見がたく臥してのみありけるにより、つれづれ慰むため、大きなうづはものに水入れ、小さき魚放ちおきて朝夕うちながむ

湛たへつる器うつはの水に鱗ひれふらせ A 見ざる目をよろこばす

顔のうへに水はじかせて飛ぶ魚を見返るだにも眉たゆきなり

鱗はねて小さき魚のとぶ音に寝るともなく寝る目あけらる

こうして見ると、まるで病む子規きの晩年の歌を見ているような心の自在さと、いわゆる、旧派的な詠風をまったく脱したがすがしさを感ずる。まさしく、曙覧の歌はいち早く近代の歌の姿をそなえ、その心は近代ののびやかさを息づいていたのだといえよう。

明治二十八年、日清戦争に従軍記者として赴いた子規が、帰国の船中で喀血し、それ以来結核性のカリエスに苦しみ、三十五

年九月に三十五歳で亡くなったことはよく知られている。俳句は子規がずっと若いころから作っていたが、短歌に力を注ぐようになったのはずっと遅くて、「歌よみに与ふる書」を発表し、自分も短歌実作に情熱を示しはじめるのは、明治三十一年からである。歌人正岡子規として活躍するのは、その晩年の闘病期間の五年間であった。

三十一年、彼の健康は B 作歌数も多かった。翌三十二年になると病状は悪化した。まだ人力車で門弟の家を訪ねたり道灌山（\*どかんやま）に吟行したりした。病室の障子をガラス戸に変えてもらって、寝ながら庭の見えるようになったことをこのうえなく喜んだ。根岸庵歌会（\*ねざしあ）が定期的に開かれるようになった。その三十二年の作品。

おのが写真を古き新しき取り出して

いたく瘦せし人の姿よ今更になんちを憐む足なへ男

夜山越え朝川（\*あさ）渉り国見せし昔思へばおとろへたるかな

かりそめに写し置きしかわが後のかたみと思へばかなしかりけり

三十三年には伊藤左千夫が入門し、長塚節（\*ながし）も教えを受けることになった。六六一首の歌を詠んだが、外出はほとんどしなくなった。

冬こもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋（\*たび）干せる見ゆ

ビードロの駕（\*か）をつくりて雪つもる白銀の野を行かんとぞ思ふ

暁の外の雪見んと人をして窓のガラスの露拭（\*ぬぐ）はしむ

病床に身を横たえながら、子規の好奇心は実に盛んであり、生き生きとした感情の反応はこのうえなく C。だからわれわれは当時の子規が置かれていた状況を知っていないながら、『竹之里歌』（\*たけのさと）を読んでいると、子規がかなり自由な行動力を持っている人であるように錯覚してしまう。これは随筆や評論においても同様だが、子規の関心は広い社会や門弟のさまざまな生活の上におよんでいる。このことが逆に、子規晩年の歌に対する世人の理解をやや疎遠にしまったこともある。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかさざりけり

子規の代表歌といふべきこの一首は、独立した形で人々の記憶にあつて、くり返し回想され鑑賞されることが多いために、<sup>5</sup> 規のこの歌に託した内容が、当然汲みとられるべき形で汲みとられていない場合がある。極端な人になると、「みじかければ……とどかざりけり」といふのはすこぶるあたりまえで、何が面白いのだ、などと云つたりする。この作品は、『竹之里歌』の中では、次のような形で示されているのである。

<sup>6</sup> 夕餉ゆふあけしたためま了りて、  
 仰向に寝ながら左の方を見れば、  
 机の上に藤を活けたる、いとよく水をあげて、  
 花は今を盛りの有様なり。  
 艶にもうつくしきかなとひとりごちつつ、  
 そぞろに物語の昔などしのばるるにつけて、  
 あやしくも歌心なん催されける。  
 斯道には日頃うとくなりまさりたれば、  
 おほつかなくも筆を取りて、

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり

瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり

藤なみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも

歌はなおこのあとに七首つづき、さらに最後に「……をかしき春の一夜や」という詞書がついている。

この詞書にあらわれているように、子規の心はこのときまるで王朝の大宮人<sup>7</sup>のように艶治<sup>えんぢや</sup>な華やぎを感じている。それは机の上に活けられて勢いよく水をあげている藤の花の豊かな美しさによる刺激である。その生命のシンボルのように華やいで艶な藤の花房を見上げているのは、一畳のたたみの上に敷いた床に仰臥して、寝返りも自由にならぬ病みおとろえた子規である。机の瓶にさされて垂れさがる長い藤の垂り房、その華麗でたくましい命の花が、いま少して子規の横たわる畳にとどかぬことの心ゆらぎ、畳と花房の間のわずかな空間に集約する子規の思いは十分に伝わってくる。

子規の歌は、若くして身を病んでどうにもならぬ追いつめられた状況での歌のはずだが、彼の猛烈な意志の強さ、あるいは表現の上に示す視野の広さと多様さは、切迫した状況を読者に忘れさせるものがある。しかしこの後の子規の歌は急に、細りを深めて哀切である。

いちはずの花咲きいでて我が目には今年ばかりの春行かむとす

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり<sup>8</sup>

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

そして、彼の死期迫ったときに詠まれたのが、「絶筆」のすさまじい三句である。

\*糸瓜咲きて痰のつまりし仏かな

痰一斗糸瓜の水も間にあわず

をととひのへちまの水も取らざりき

この「絶筆」の三句を見ていると、子規の本領はやはり俳句にあつたのだと思わざるを得ない。命終のときに臨んでなお最後の剽<sup>9</sup>げを演じてみせるのは、俳諧のおどけの心に徹した者、命の瀬戸際までゆとりある心で自己を見とどけている者にして、はじめてなし得ることである。歌人がその晩年に詠むおのずからな寂寥<sup>せきりょう</sup>の歌も人の心を惹<sup>ひ</sup>きつけるけれど、最後の俳諧を演じてみせる子規の気迫には、もう一つスケールの大きな表現する者の面魂<sup>つたましい</sup>を感じずにはいられない。

そういう子規の後の短歌を継承した伊藤左千夫・長塚節のうち、節もまた結核によつて若くして命を落とした人であつた。

五月二十二日夜、こころに苦惱やみがたきこと起りて

小夜<sup>さよ</sup>ふけてあいろもわかす悶<sup>もだ</sup>ゆれば明日は疲れてまた眠るらむ

十六日朝、博多を立つ、日まだ高きに、人吉に下車し林の温泉といふにやどる、暑さのはげしくなりてより身はいたく疲れにたりけるを、俄<sup>11</sup>かに長途にのぼりたることなれば、只管<sup>ひたすら</sup>に熱の出でんことをのみ恐れて

手を当てて心もとなき腋草<sup>わきくさ</sup>に冷たき汗はにじみ居にけり

日ごろ熱高ければ、ひねもす蒲団引き被りてのみ苦しみけるほどに、もとより入浴することもなかりけるが、たまたま十八日の朝まだき、まだ咲くやらむと朝顔のあはれに小さくふふみたる裏戸をあけていでゆく

浴<sup>ゆ</sup>みして手拭ひゆる朝寒みまだつぼみなりそのあさがほは

晩年の名作『<sup>＊</sup>鍼の如く』はこうして歌日記のような形で編まれていて、詞書には苦しみの跡がかなりくつきりと刻まれているが、歌は節の短歌の特徴である抑制のきいたすがすがしい透明さを最後まで崩していない。

われわれは過去の歴史のどの時代にもなかった豊かさ、長寿の時代に生きている。しかし、癌のようにまだ治療法の完全には明らかになっていない病があり、長寿を保ち得ている人びとのうえにも、死の衰えは確実にその確かな歩みをゆるめることなく迫っている。

結核による夭折の鮮烈なたましざとは別の形で、人はおぼろ夜の不透明な闇の中に、自己の命終のおとずれを感知しなければならなくなっている。いや、感知するすべすら失って、なお無明のとめどない世を漠々と生き続けなければならぬようである。病む者の歌も、従来のように死を明らかな対象に見すえてうたうのと違って、よりとらえがたく掴みとりがたい対象をどう表現するかという、困難な問題に当面しているといえよう。

(岡野弘彦『悲歌の時代』による)

〔注〕

\*橘曙覧Ⅱ文化九年(一八二二)～慶応四年(一八六八)。江戸時代末期の歌人。

\*子規Ⅱ正岡子規。慶応三年(一八六七)～明治三十五年(一九〇二)。俳句・短歌・散文などの多方面において、近代文学を方向づける大きな影響を及ぼした。

\*旧派的な詠風Ⅱ江戸時代に主流であった朝廷風の型にはまった和歌の詠みぶり。

\*カリエスⅡ結核菌等の二次感染のため骨組織が壊死する病気。

\*「歌よみに与ふる書」Ⅱ正岡子規の歌論。古今風の和歌を痛烈に批判したことで知られる。

\*道灌山Ⅱ上野から王子方面に連なる台地の一角で、江戸時代からの景勝の地。

\*根岸庵 〓 台東区根岸にあった子規の寓居。

\*伊藤左千夫 〓 元治元年(一八六四)〜大正二年(一九一三)。歌人・小説家。

\*長塚節 〓 明治十二年(一八七九)〜大正四年(一九一五)。歌人・小説家。

\*『竹之里歌』 〓 正岡子規の歌集。

\*糸瓜咲きて 〓 糸瓜の水は痰を切るのに効果があるという俗信があった。

\*『鍼の如く』 〓 長塚節の連作歌集。

問一 傍線部「死ぬる命とりかへさるるくすり師は世はひろけれどあるべく思はず」の大意として最適なものを、次の①〜⑤か

ら選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 1。

- ① あやうく死にそうな重病だったが、世界中の医師が苦心して治療してくれたので回復した。
- ② 死ぬと決まった命を救ってくれる医師は、世間は広いけれど、いるとは思えない。
- ③ 寿命が尽きた命を、自分の命と取り替えてくれる医師は、広い世界にもいるはずはない。
- ④ 死んでしまいそうな重病から救ってくれる医師は、世の中が広すぎて容易に見つからない。
- ⑤ 病気のために死んでしまう医師にとっては、世の中が広くてももう見聞を広めることはできない。

問二 文中の A に入る語句として最適なものを、次の①〜⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 2。

- ① 朝夕
- ② 海川
- ③ 神仏
- ④ 野山
- ⑤ 真心

問三 傍線部2「近代ののびやかさ」とは、ここではどのような意味か。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **3**。

- ① 貴族に気兼ねせず和歌が詠めるようになった自由な気分。
- ② 病気の治療が容易になった時代を生きる幸せ。
- ③ 自分の感じたことを感じたままに詠もうとする自在さ。
- ④ 文語体から解放された和歌の自由な言葉遣い。
- ⑤ 明治が近くなった時期の自由な空気。

問四 文中の **B** に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **4**。

- ① 一進一退をくり返し
- ② 徐々にそこなわれ
- ③ 小康を保ち得て
- ④ すっかり回復し
- ⑤ もはや絶望的な状態で

問五 傍線部3「足袋」の読みを平仮名で記せ。解答用紙(その2)を使用。

問六 傍線部4「しむ」の職能(働き)として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **5**。

- ① 尊敬
- ② 推量
- ③ 使役
- ④ 詠嘆
- ⑤ 意志



問七 文中の C に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 6。

- ① いたましい
- ② 俊敏だ
- ③ 繊細だ
- ④ たくましい
- ⑤ 喜ばしい

問八 傍線部5「子規のこの歌に託した内容が、当然汲みとられるべき形で汲みとられていない場合がある」とあるが、「子規のこの歌に託した内容」を述べた一文をこれより後の記述の中から探し、冒頭と末尾の四文字を抜き出せ(句読点を含む)。解答用紙(その2)を使用。

問九 傍線部6「夕餉したため了りて」を現代語訳せよ。解答用紙(その2)を使用。

問十 傍線部7「大宮人」の意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7。

- ① 伊勢神宮の神官
- ② 儀式で舞いを舞う人
- ③ 即位して天皇になった人
- ④ 朝廷に仕える貴族
- ⑤ 平安時代の女性たち

問十一 傍線部8「夕かたまけて」の意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8。

① 朝から夕方にかけて

② 夕方を除いて

③ 夕方に限って

④ 夕方には疲れて

⑤ 夕方が近づいて

問十二 傍線部9「馴げ」のここでの意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 9。

① 毅然とした態度

② 生への執着

③ 表現への意欲

④ ひょうきんな言動

⑤ 皮肉な振る舞い

問十三 傍線部10「ゆとりある心で自己を見とどけている」とあるが、この語句の表すところと最も近い意味のことばを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 10。

① 疎遠

② 信頼

③ 情熱

④ 諦観

⑤ 無明

問十四 傍線部11「俄かに」の読みを平仮名で記せ。解答用紙(その2)を使用。

問十五 正岡子規の俳句を、次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **11**。

① 鴨頭の十四五本もありぬべし

② 芋の露連山影を正しうす

③ 遠山に日のあたりたる枯野かな

④ 水枕ガバリと寒い海がある

⑤ 湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

問十六 この文章の趣旨と合致しないものを、次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **12**。

① 今という時代にあつては、死がいつ訪れるのかが分からないままに、常に死を意識しつつ生きなければならなくなっている。

② 江戸時代末期の橘曙覧の短歌と、明治時代の正岡子規の短歌の作風には、共通性がある。

③ 現代においては、死というとらえがたい対象を主題として和歌や俳句を作ることとは難しくなっている。

④ 正岡子規の本領は、短歌よりは俳句においてより生き生きと發揮されている。

⑤ われわれは長寿の時代を生きているため、病と向き合う短歌や俳句を詠まなければならない必然性はむしろ高まっている。

